

論を展開せしめたところにその意義を見出し得るのであった。

つぎに、いささか仏身観についてもふれてみたい。懐感は古来から三昧発得の師とされている。師の仏身観は、念仏三昧の観仏論が主であって、観浄土の義は少ない。念仏三昧には有相の念仏三昧と無相の念仏三昧との二種の行業があつて、かかる有相の念仏三昧の麤の色身観から、無相の念仏三昧の細の法身観へと展開することを説き、これらの義を『華嚴経』等の経説に基づいて詳述したものである。

## 清沢先生とキリスト教

幡 谷 明

清沢先生について語られる場合、先生の所謂三部経と云われる、阿含経・エビクテタスの語録・數算抄については、これまでも屢々問題にせられて来た。しかし、明治の仏教徒にとり或る意味では自らの存亡にかかわるものとして、重大な意義をもつものであったキリスト教に対し、清沢先生はどのような態度をとられたかという点については、これまで論及せられたものを見出すことが出来ない。

では清沢先生は、キリスト教に対して、全く無関心であつたのだろうか、否、決してそうではない。確かに清沢先生のキリスト教観を窺い得る資料は、決して多くはなく、僅か二三の断片的なものを出ないが、しかしそれらの中には、他の明治の仏教徒の示

した態度とは異なつた、先生独自のものを見出すことが出来るように思われるから、以下その点について、少しく窺つてゆきたいと思う。

明治三十二年発行の『名家仏教講演集』には、先生が知恩院で講演された「仏教の興起」という一文が戴せられているが、そこには、次のような明治仏教史についての先生の見解が示されている。(全集第六卷所収・四五六―四六五頁)

(1) 廃仏毀釈によつて仏家が俗人同様の姿に顛落した時……維新时期

(2) キリスト教の進出に刺戟されて学理や哲学で對抗した時……明治二十年代前后

(3) 信仰の本領を知つ時……三十年代

その第三段階について、先生は、「宗旨的の信仰を以て初めて仏教真正の教徒とするものである。彼の耶蘇教の如きも、黙從信を以て數百年間欧州の天地に宗教たるの位置を保ちて居たが、彼と此と教理の浅深に比較すべきものでないから、今且らく措いて弁せぬが、仏教もつまり教理深奥、中々吾人浅見の其の妙蘊を伺うべきものでないから、宗旨的の信仰に皈して其の妙理海中に遊泳するより外はない。」と云われている。ここに吾々は、先生のキリスト教及び仏教に対する根本的態度を見出すことが出来るであらう。すなわち先生にとって、仏教とキリスト教との比較対照ということは、問題にならなかつたのであり、それは、明治三十四年伊勢四日市の関西仏教青年会の夏期講習会における講演、「精神主義(その二)」(全集六卷・六一―六五頁)の上に、更にはっきりと見出される。ここでは、天文説や創造説の論議によつ

て両者の価値を決定しようとする段階から、靈魂不滅や一神実在、旧法実在という哲学上の問題によって価値の優劣を定めようとする段階に進展し、井上円了氏の「仏教活論」、中西牛郎氏の「組織仏教論」、村上專精氏の「仏教統一論」等により、盛んに論説せられたが、それは次いで、社会的実践、倫理性の上で論議せられるに至ったことを紹介し、それに対して、先生は自らの立場を「種々なる学問上の論説は、如何に多様になり、進歩し、興廃するとも、精神主義は決してそれ等の變動に左右せられざるものであり」、「一神論を取る人には一神論を取るを妨げず、汎神論を取る人には汎神論を取るを妨げ」ないのみでなく、「實際の行為上においても、精神主義は決して客観的に善悪邪正等を認定」するものではないことを明らかにせられている。しかしそれは、如何なる場合にあつても、「須らく内観反省して、自家の心機を開展すべきこと」が、宗教を信する者にとつての、唯一絶対の究極的関心事あることを勧められたものであつて、決してそれらの問題に対し無関心であつてよいことを勧められたものではない。

そのことは、例えば、明治三十五年十一月二十七日の浩々洞宛書簡に、『此の頃中にルナン氏の「キリスト伝」及び「アンチ・キリスト」、セネカ氏の「道義書」を致得候：』と記されていること、同年五月四日には、「基督神子論」についてという精神講話をされていること、或いは安藤州一師に対して、「余はエビクタタスの主義に従う、しかも他力本願の信仰は動かざるなり。余はソクラテスを尊信す、しかも如来の救済を疑わざるなり。余はキリストの山上の聖訓を喜ぶ、しかも大悲の誓約の誤らざること信する」と語つておられることの上にも見出し得る処である。

殊に安藤州一師に対する談話は、先生の根本的立場が如何なるものであつたかが、明確に提示されているものとして注意すべきものであろう。

尚それに関連して注意しておきたいのは、大浜の西方寺に先生の読まれた、英訳新約聖書が残されており、そこに朱のアンダーラインが引かれていることである。(書込みはない)その聖書は一八七四年(先生十二歳でこの年愛知外国語学校に入学)ニューヨーク出版のものであり、先生が何時頃読まれたものか明らかでないが、暁島敏師の『清沢先生の信仰』に依ると、師が三十六年三月三日大浜に先生を尋ねられた時、先生が日課として、正信念仏(朝六時〜七時歎異抄)不顔身命(八時〜九時エビクタタス)少欲知足(十時〜十一時阿含経)……遠離罪過(午后二時〜三時バ イブミ)を読んでおられたことが記されているから、或いはその時のものであるかも知れない。そのアンダーラインの引かれた箇所については、詳細に検討しなくては必要があるが、先生が聖書を読まれた限は、遠離罪過という自らに課せられた云華の上に明白であり、それは先の安藤州一師への談話と照合することによつても明瞭である。

そこに吾々は、何処までも善悪の問題を徹底して追求することにより、善悪にかかわる自己の全てが捨て去られ、破られた処において、真に善悪を超越した世界に出ることが、先生の根本的立場であつたことを窺い知ることが出来るであらう。実に先生畢生の仕事は、倫理や哲学等とは異なる宗教としての仏教独自の立場を、自らの全生命を賭し、全生活を実験台として開顕せられたことであつたと云わなければならない。